

コラム 坂本と坂本城

比叡山延暦寺の里坊が多敷置かれ、その門前町として発展した坂本は、水陸交通の要衝の地の利をいかし、中世には経済的にもおおいに繁栄をしました。当時、大消費地である京都には、全国から物資がもたらされていました。北陸地方などの物資は、琵琶湖の水運を利用し、坂本で荷揚げした後、陸路京都まで運ばれます。このとき物資を馬を使って運んだ人々を馬借（ばしゃく）と呼びます。坂本には馬借一揆で知られるように、数多くの馬借がいて、その盛況ぶりが偲ばれます。

このような坂本も、信長の比叡山焼き討ちにより様相が一変します。焼き討ち後、信長は支配の拠点として明智光秀に坂本城の築城を命じます。下坂本の湖岸に築かれた城は、大天主・小天主を備え、城内に湖水を引き込んだ湖城ともいえるもので、宣教師ルイス・フロイスをして安土城に次ぐ天下の名城と言わしめました。本丸部分の発掘

調査では、礎石建物や柵・井戸などが見つかり、それに伴って多くの土器や輸入陶磁器などが出土しました。また、

平成6年の琵琶湖異常渇水時に、湖中より本丸の石垣が姿を現したのは記憶に新しいことです。



坂本城湖中の石垣

コラム 森可成（もりよしなり）

戦国時代の武将で、生国は美濃とも尾張とも伝えられています。当初は美濃の斉藤氏に仕えていましたが、その後早い段階で織田信長に仕えたと言われています。天文二〇年の清洲攻めを皮切りに、美濃斉藤攻め、桶狭間の戦

い、近江六角氏攻め、伊勢大河内城攻めなどに参加し、戦功を立てています。

元亀元年、越前朝倉攻めが浅井氏の裏切りにより失敗すると、信長は麾下の武将を近江に配備し、防衛線を張ります。この折、森可成は宇佐山城を信長から預かりました。他に柴田勝家は長光寺城、佐久間信盛は永原城、中川重政は安土城、木下秀吉は横山城、丹羽長秀は佐和山城の守備を任せられます。森可成がこれらの武将とともに近江の城で守備を任されたことから、信長の有力家臣であったことがわかります。しかし、同年9月に浅井・朝倉勢3万の大軍の攻撃にあい、わずか6百の手勢をもって坂本で迎え撃ちましたが、多勢に無勢、奮戦及ばず討ち死にしました。48歳と伝えられます。可成を討ち取った浅井・朝倉勢は、この勢いで宇佐山城の奪取を図りましたが、残った織田軍の手勢により守り抜かれました。

なお、可成の子には、信長の近習として知られる森欄丸がいます

コラム 磯野員昌と佐和山城・新庄城

伊香郡高月町磯野を本貫とする磯野氏は、北近江の守護京極氏の家臣でした。後に員昌の代になると浅井長政に仕えるようになり、六角氏との最前線である佐和山城を預けられ、城主として守備にあたりました。

元亀元年6月の姉川の戦いでは浅井軍の先鋒として出陣し、織田軍の前衛を次々打ち破り、信長の本陣に迫る活躍を見せましたが、反撃を受け、撤退を余儀なくされました。この時、退路を断られたにもかかわらず、僅かな手勢でこれを突破し、佐和山城まで帰還しています。帰還後、約7ヶ月間佐和山城に籠城して、包囲する丹羽長秀に対峙しましたが、翌元亀2年ついに信長に降伏することになりました。

降伏後、高島郡小川村（現朽木村小川）

に蟄居した員昌に対し信長は、高島郡内における山門領および浅井氏支配地を与え、郡内の支配を命じます。この時の拠点となった城が、新庄城です。員昌が入城することで、新庄城は小地

域の城から高島郡支配の城へと大きく様変わりしました。しかし、天正6年、員昌は信長の上意に違背して逐電し、

高島郡支配の拠点も新庄城から大溝城へ移ってしまいました。

コラム 大船のはなし

「五月廿二日、佐和山へ御座と移され、多賀・山田山中の材木をとらせ、佐和山麓松原へ勢利川通り引下し、国中鍛冶・番匠・杓を召し寄せ、御大工岡部又右衛門棟梁にて、舟の長さ三十間・横七間、櫓を百挺立てさせ、艦軸に矢箒を上げ、丈夫に致すべきの旨仰聞かせられ、在佐和山なされ、油断なく夜を日に継仕候間、程なく、七月五日出来訖。事も生便敷大船上下耳目と驚かす。案のごとく、」

『信長公記』巻六

元亀四年、信長は將軍足利義昭が反信長の戦備を整えているとの情報を得ました。そこで佐和山から坂本まで、琵琶湖を渡るために、急遽巨大な舟の建造にかかります。建造にあたっては、

後に安土城天主建設の大工頭を務める、岡部又右衛門が棟梁となり、信長自らが工事の指揮監督をしました。大船は長さが約六〇m・幅が約一四mで、現在琵琶湖に浮かぶ船の中で最も大きいミシガンやピアンカとほぼ同じ位の大きなものです。

「七月廿六日、信長公御下り、直に江州高嶋表彼大船を以て御参陣。陸は御敵城木戸・田中西城へ取懸け攻められ、海手は大船と推付け、信長公御馬廻を以てせめさせらるべき処、降参申し罷退く。則 木戸・田中西城明智十兵衛に下る。」

『信長公記』巻六

しかし信長の肝いりで作られた大船も、完成直後の七月六日に坂本まで使った後、右の文献にあるように、七月二六日の高島攻めに使われたきりで、その後は記録から消えてしまいます。次に現れるのは、天正四年のことで、解体されて小さな船十艘に作り替えられる様子が『信長公記』に記されています。